

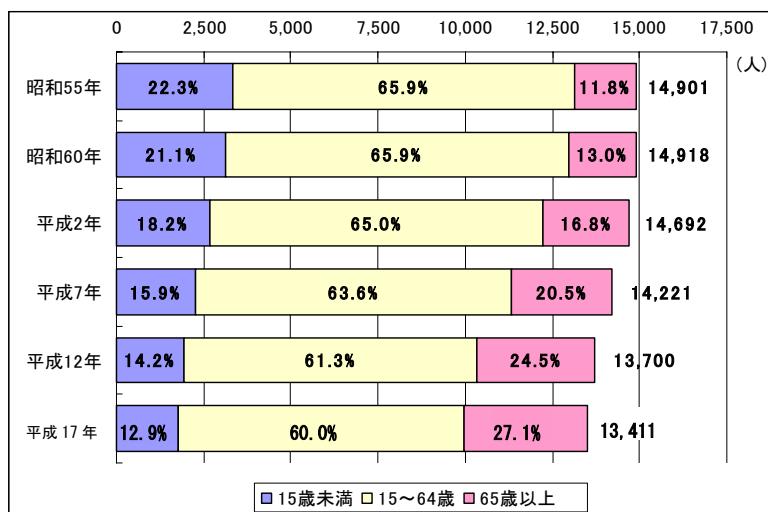
(5) 桑折町の暮らし

➤ 進む少子高齢化（年齢階層別人口の推移）

桑折町の人口は、平成17年10月1日現在、男性が6,355人、女性が7,056人で、合わせて13,411人となっています。

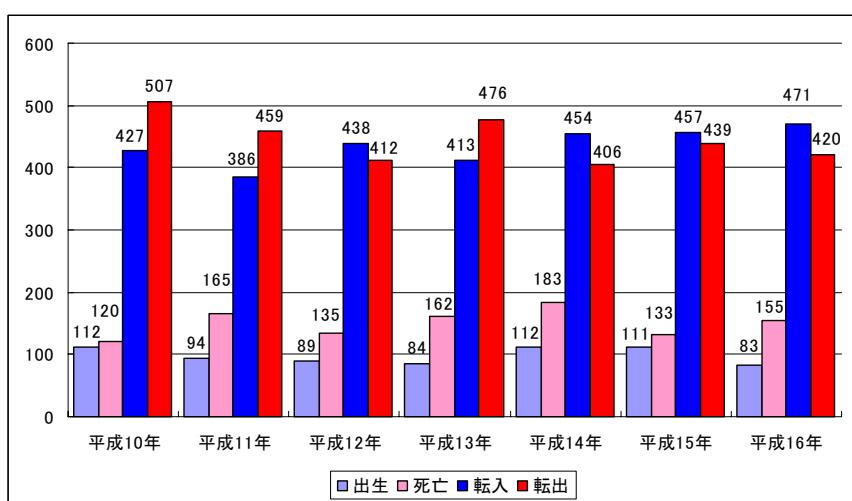
平成17年度における年齢階層別人口をみると、幼齢人口（0～14歳）が1,726人、生産年齢人口（15～64歳）が8,053人、老齢人口（65歳以上）が3,631人となっており、高齢化率は27.1%です。幼齢人口は減少傾向にあり、少子高齢化の進行がうかがえます。

また、人口は微減傾向を示していますが、世帯数は増加しており、核家族化の進展も顕在化しています。



➤ 自然減、社会増の傾向（人口動態）

少子化の影響で自然増加率は減少傾向にありますが、福島市の通勤圏に位置することなどから、近年の社会動態は転入者数が転出者数を上回り、社会増加率は増加傾向をみせています。



➤ 総人口の半数が市街化区域に暮らしている（人口の分布と密度）

総人口 13,411 人のほぼ全ての人が都市計画区域内に居住しています。このうち、市街化区域の人口は 6,700 人（総人口比 50.0%）となっています。

人口密度は、市街化区域では 26.8 人／ha、市街化調整区域では 3.1 人／ha となっています。

【人口の分布と密度の推移】

		平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年
市街化区域	面積 (ha)	249	249	249	250
	人口 (人)	6,600	6,500	6,600	6,700
	人口密度 (人／ha)	26.5	26.1	26.5	26.4
市街化調整区域	面積 (ha)	2,151	2,151	2,151	2,150
	人口 (人)	8,100	7,700	7,100	6,700
	人口密度 (人／ha)	3.8	3.6	3.3	3.2

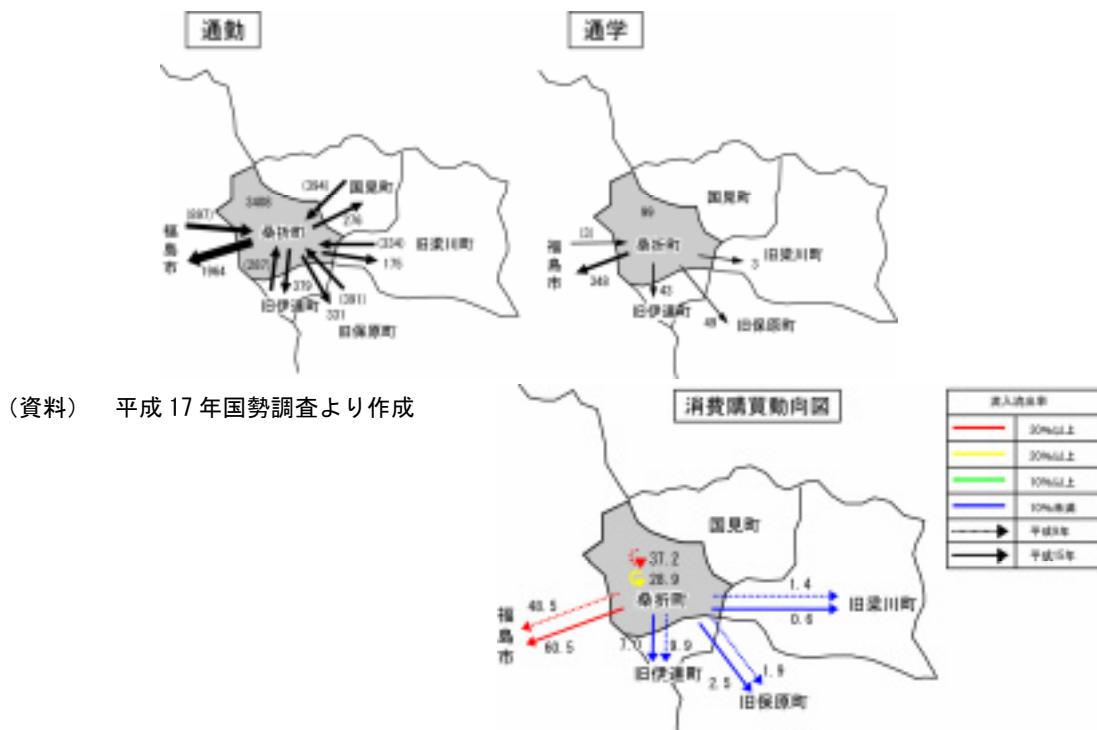
資料) 福島県都市計画年報

➤ 福島市や伊達市への依存度が高い（人口流動と消費購買動向）

通勤・通学ともに福島市とのつながりが強く、次いで伊達市や国見町とのつながりもみられます。

平成 17 年国勢調査によると、流出就業者 3,942 人、流入就業者数 2,560 人となっており、流入・流出とも福島市が 1 位となっています。通学については、町内に高等学校がないこともあり、流出就学者が 557 人（半数以上は福島市）となっています。

消費購買動向をみると、平成 15 年現在、町内での消費購買割合は 28.9% と約 3 割を占め、約 7 割が流出しています。平成 9 年は 37.2% であったため、町内での消費購買割合は減少傾向にあります。流出先は福島市が約 6 割を占め、次いで伊達市となっています。



➤ 広域交通の利便性に恵まれたまち（桑折町の交通）

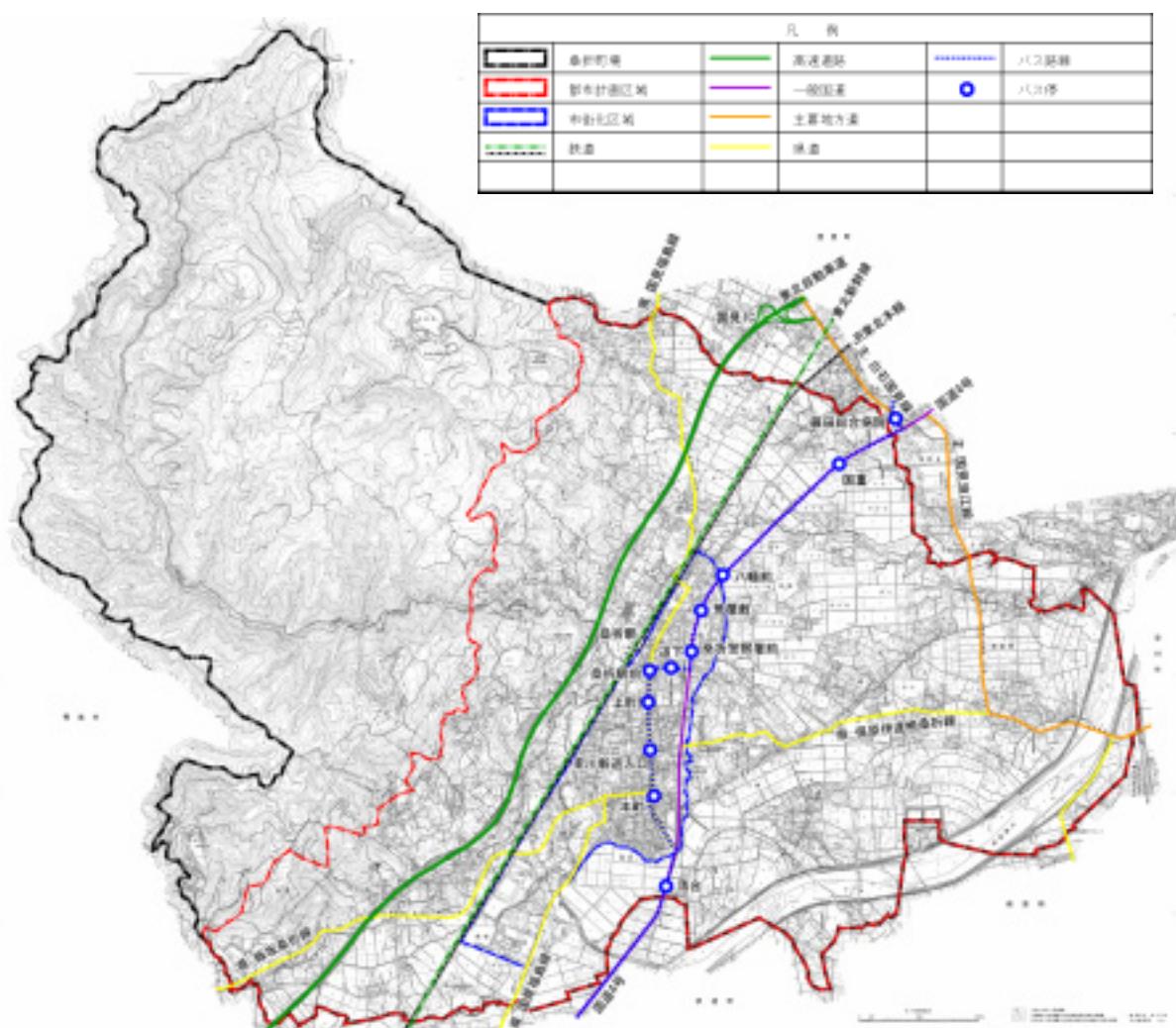
古くから交通の要衝であった桑折町は、現在も広域交通の利便性に恵まれています。南北に一般国道4号、東北縦貫自動車道、JR東北本線及び東北新幹線という広域幹線交通網が貫通し、東北縦貫自動車道国見I.C.からは約3km、東北新幹線福島駅からは約12kmの位置に位置しています。

(道 路)

桑折町の大動脈といえる一般国道4号は、交通混雑緩和や交通安全性の向上などを目指し、「伊達拡幅事業」の4車線化工事が進められています。

また、町内の幹線道路としては、主要地方道浪江・国見線、一般県道国見・福島線、一般県道飯坂・桑折線、一般県道保原・伊達崎・桑折線があります。都市計画道路は、一般国道4号を含む7路線（延長8.95km）があり、整備率33.3%となっています。

公共交通である路線バスは、廃止路線が相次ぎ、現在では福島市、国見町を結ぶ3路線が運行されていますが、運行本数は少ない状況です。



(鉄道)

鉄道駅は、町の中心に「JR桑折駅」がありますが、南側の「JR伊達駅」(伊達市)、北側の「JR藤田駅」(国見町)も本町から比較的近い位置にあります。JR桑折駅からJR福島駅までの所要時間は13分であり、JR桑折駅利用者は年間約30万人となっています。

JR桑折駅は、駅前広場や無料駐車場が整備され、福島市等への通勤や買い物に利用されています。



【JR桑折駅駅前広場】

➤ 都市型産業構造への移行（桑折町の産業）

桑折町の就業者数は、平成12年現在、7,154人となっており、内訳としては、第一次産業が1,104人、第二次産業が2,619人、第三次産業が3,429人となっています。

基幹産業である農業生産の低迷、消費流出による商業の衰退、景気停滞により進まない企業誘致等厳しい状況にあります。

生産物のブランド化、後継者対策、人口減少対策と合わせ、勤労者が住み続けられる環境をいかに創出するかという活性化対策が課題となっています。

(農業)

かつては地域の気候特性を活かした養蚕農家が多くみられましたが、時代の変遷に伴い、桑畠は果樹園に変わってきました。桃やリンゴ、柿などは特産品として有名です。（リンゴの“王林”*は本町原産、桃の“あかつき”は天皇家献上品）

また、阿武隈川や産ヶ沢川、先人たちが築いた伊達西根堰の恩恵を受け、水稻農業も盛んです。

桑折町における農業産出額は、30億円前後で推移していますが、農業就業人口は減少傾向にあり後継者問題等が顕在化しています。

なお、平成17年現在の農地の状況をみると、1012ha（経営耕地945ha、耕作放棄地67ha）となっています。（2005年農林業センサスより）

* 王林：桑折町上郡の大槻只之助氏が、1931年からりんごの品種改良に取り組み、ゴールデンデリシャスの種子を播種し、その実正を育成してきました。1943年に初結実し、選抜を行い、それを原木として接木で増殖し、栽培していました。1952年に「林檎の中の王様」という意味で王林と命名し、その年から東京市場に出回るようになりました。王林は、ゴールデンデリシャスと印度（花粉）の実生の中から選択されたものと言われています。

	農業産出額 (名目) (百万円)	農業産出額 (実質) (百万円)	農家戸数 (戸)	農業就業人口 (人)	経営耕地 面積 (ha)
平成 2 年	3,488	2,951	1,286	1,260	1,088
平成 7 年	3,281	3,107	1,220	1,099	1,027
平成 12 年	2,900	2,900	888	1,103	932
平成 15 年	2,470	2,515	—	—	—
平成 17 年	2,680	2,685	824	989	945

資料：(農業算出額=日本の統計 2004)
(農家戸数、経営耕地面積=農林業センサス)
(農業就業人口=国勢調査)



(商 業)

まちの中心部の旧奥州街道沿いに 1.5km にも続く商店街が形成されています。昔、桑折宿として栄え、半田銀山や蚕糸業の繁栄の頃には全盛を極めた中心市街地でしたが、車社会の到来や、福島市や伊達市等の大型小売店進出に圧迫され、現在は低迷が続いていること、活性化対策が課題となっています。現在は、町や商工会青年部を中心としてイベント開催等の取り組みが進められています。

一方、一般国道 4 号等の幹線道路沿いには新たな商業施設等の立地もみられますが、中心商業地とのバランスを考慮した適正な土地利用について検討していくことが求められています。

桑折町における年間商品販売額は、減少傾向にありましたが、平成 11 年以降は横ばいを示し、平成 14 年は 11,489 百万円となっています。

	商店数	従業員数 (人)	年間商品 販売額(名目) (百万円)	消費者 物価指数	年間商品 販売額(実質) (百万円)
平成 3 年	200	858	15,019	93.7	16,029
平成 6 年	175	811	13,128	96.9	13,548
平成 9 年	165	721	12,578	99.7	12,616
平成 11 年	173	763	11,452	100.5	11,395
平成 14 年	158	757	11,489	98.2	11,700

(資料：商業統計)

(工 業)

町の南部に 57.3ha の「桑折工業団地」を開発し、優良企業の誘致や住宅地に点在する工場等の移転促進をしています。立地条件に恵まれたこともあり、現在、約 2,000 人の従業員が働いています。しかし、近年は事業所数、従業員数ともに減少傾向が続いている。景気の低迷もあって新規誘致等が困難な状況であるため、今後の雇用機会拡大方策も課題となっています。

桑折町における製造品出荷額等は、平成 3 年を最高に増減を繰り返しながら若干減少しており、平成 17 年においては約 476 億円となっています。

	事業所数	従業員数 (人)	製造品出荷額 等 (名目) (百万円)	卸売物価指数 (工業製品)	製造品出荷額 等 (実質) (百万円)
平成 3 年	56	2,597	51,394	109.2	47,064
平成 6 年			43,052	104.6	41,159
平成 9 年			41,104	102.7	40,023
平成 12 年	49	2,154	42,797	100.0	42,797
平成 15 年	44	1,908	40,599	97.7	41,555
平成 17 年	44	2,048	47,632	97.8	48,703

(資料：工業統計)



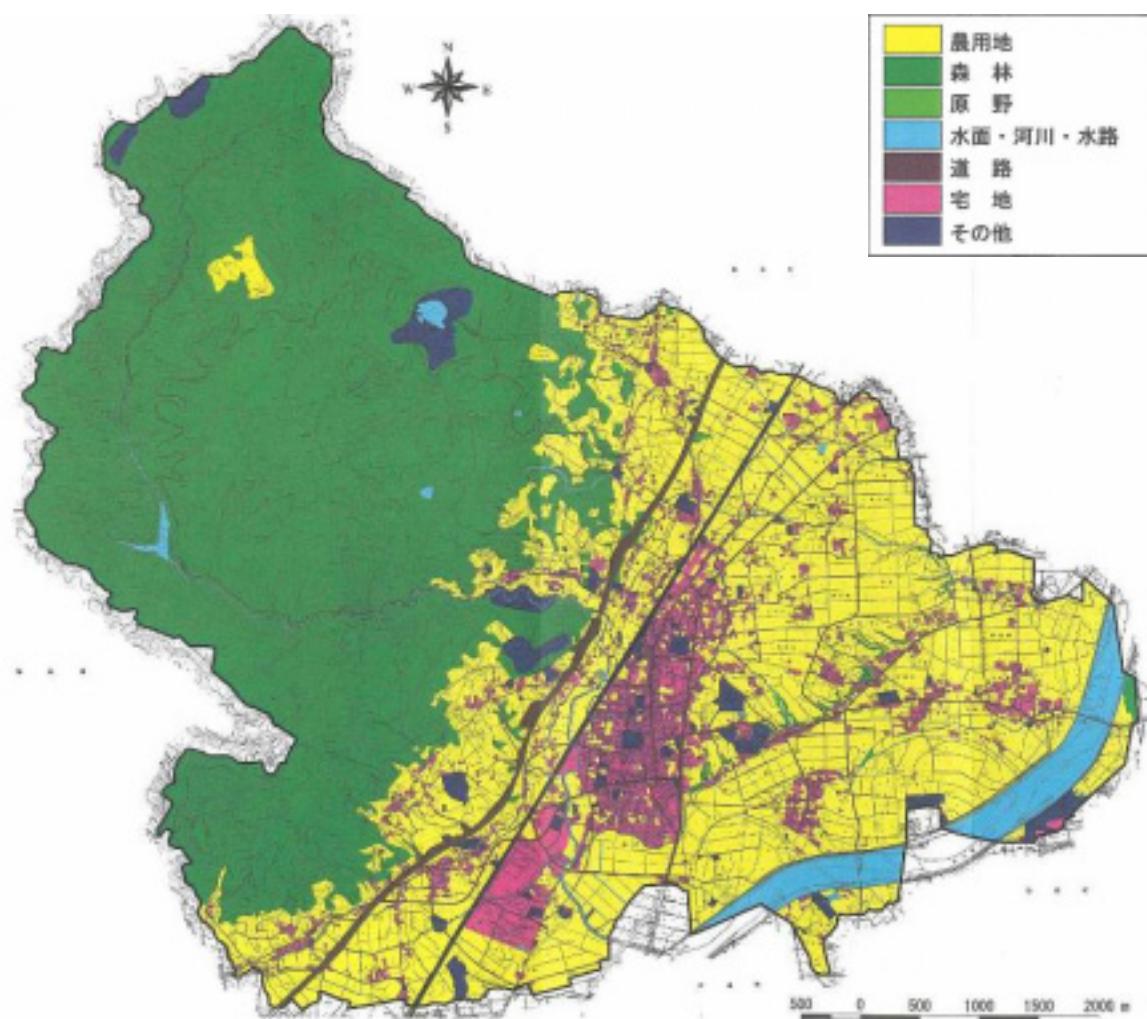
【桑折工業団地全景】

➤ 自然的土地利用の多い桑折町（土地利用と区域区分）

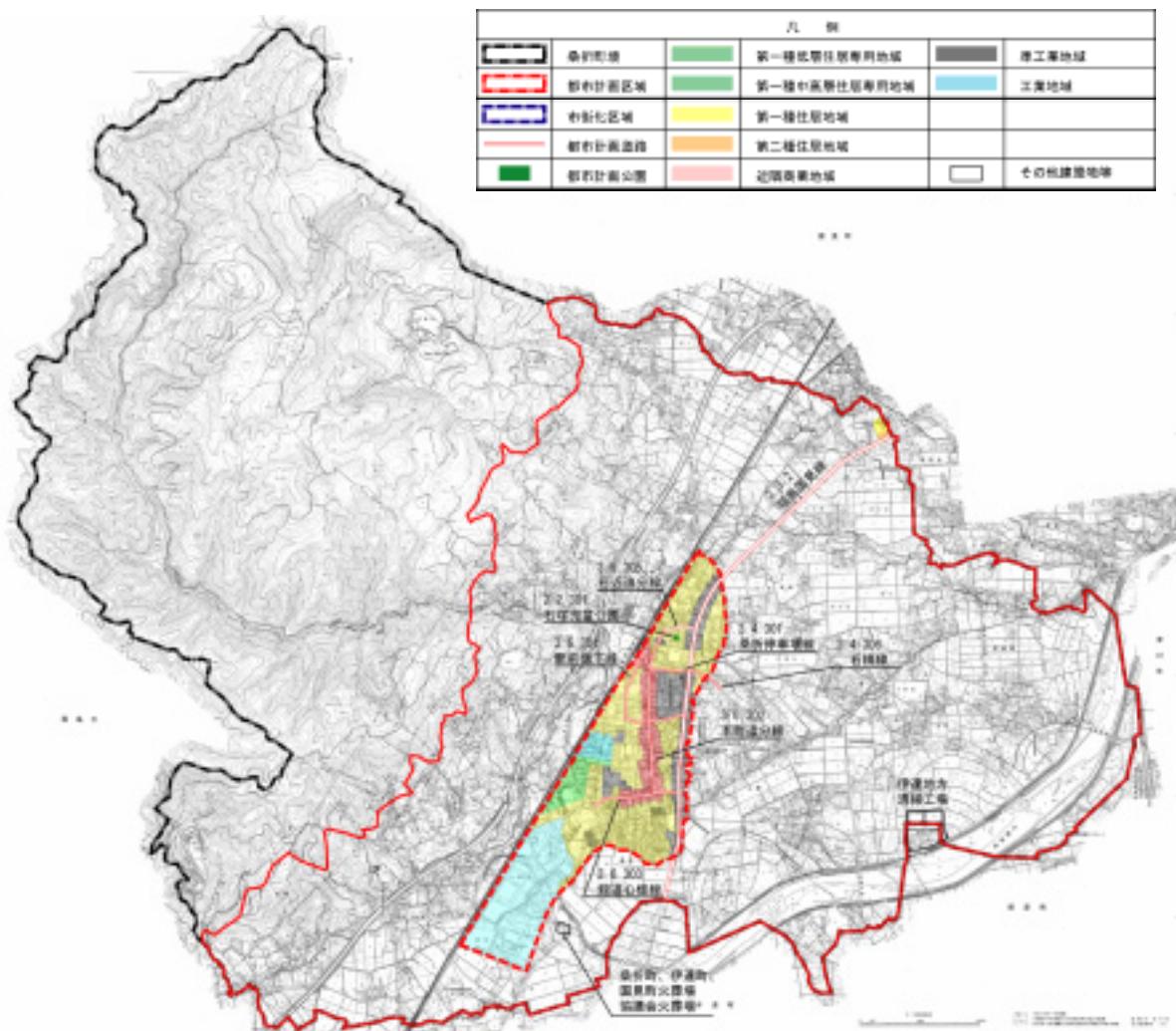
桑折町は、総面積 4,297ha のうち、農地、山林、水面などの自然的土地利用が約 74%を占めています（平成 12 年現在）。昭和 55 年からの約 20 年間の推移をみると、農用地が約 300ha 減少し、宅地や道路等に転用されています。（国土利用計画）

区域区分についてみると、都市計画区域は、2,400ha と行政区域の約 56%を占めています。このうち 249.7ha（約 10%）が市街化区域となっています。市街化区域は、住居系用途が 135.6ha、工業系 92.8ha、商業系 21.3ha となっています。

また、町の中心部に大きな面積を有する「福島蚕糸販売農業協同組合連合会」が平成 14 年 3 月に解散したことなどを背景として、市街地における土地利用の適正な見直しが緊急課題となっています。



【土地利用現況図】

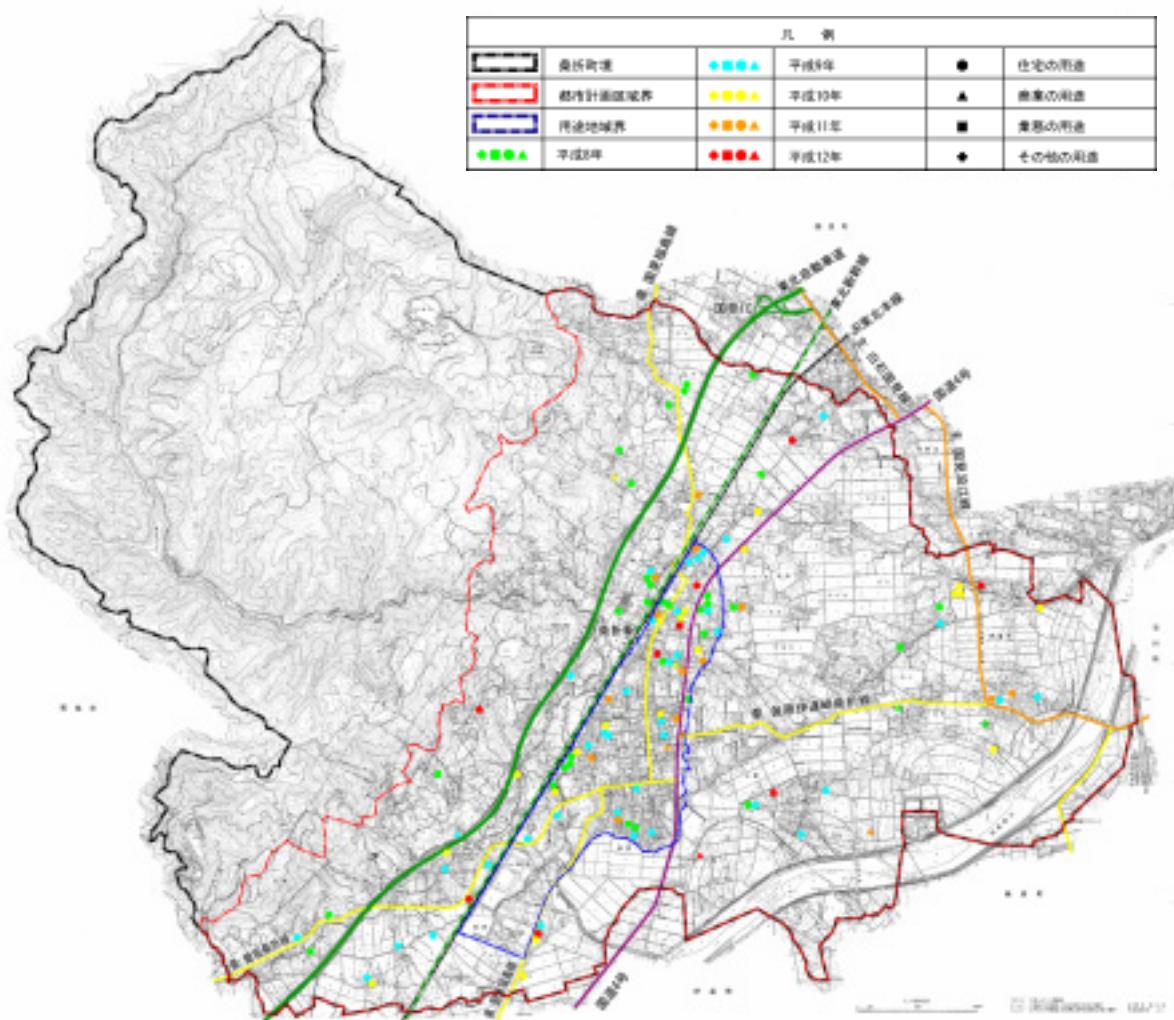


【都市計画図】

➤ 駅周辺や道路沿道に開発が目立つ（宅地開発動向）

町内における主な開発行為としては、組合施行による4箇所の土地区画整理事業（全て施行済）と土地開発公社による桑折工業団地の造成があげられます。

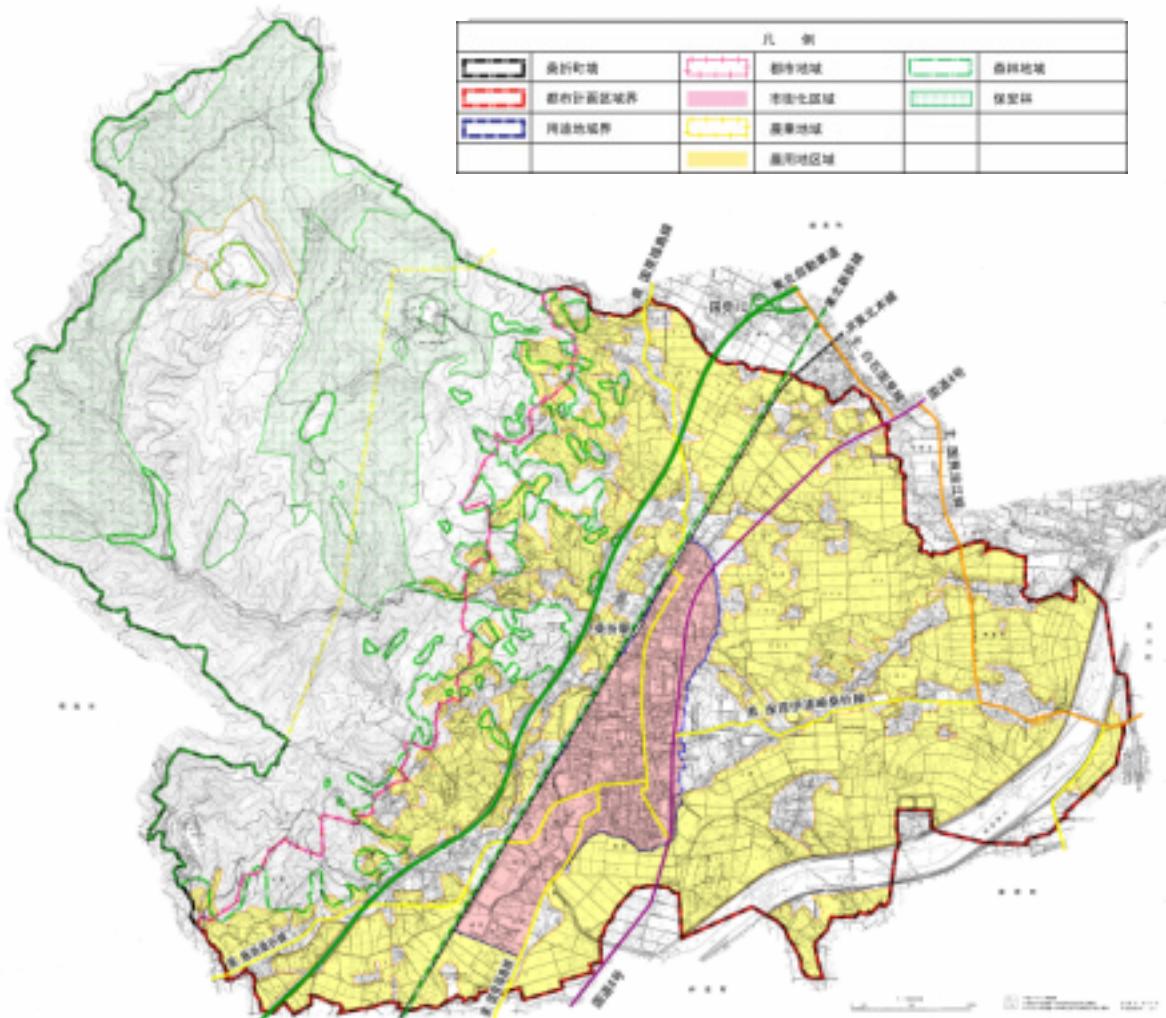
また、近年の宅地開発動向（農地転用動向）をみると、市街化区域（主にJR桑折駅近隣）に集中していますが、市街化調整区域の既存集落や道路沿いにも開発動向が見られる結果となっていることから、適正な誘導が必要であると言えます。



【宅地開発動向図（農地転用）】

➤ 適正な土地利用のための規制

都市計画法以外の土地利用における規制としては、「農業振興地域の整備に関する法律^{*1}」による農業振興地域が 2,926ha(うち農用地区域 1,077ha)、「森林法」に基づく区域が 1,781ha となっています。また、保安林^{*2}532.04ha、急傾斜崩壊危険区域^{*3}5.19ha(4箇所)、砂防指定地^{*4}35.88ha が指定されています。(阿武隈川地域森林計画)



【土地利用規制図】

*1 農業振興地域の整備に関する法律：

総合的に農業の振興を図ることが必要と認められる地域について、その地域の整備に関し必要な施策を計画的に推進して、農業の健全な発展を図ることを目的とした法律。

*2 保安林：水源のかん養、土砂の崩壊その他の災害の防備、生活環境の保全・形成等、特定の公共目的を達成するため、農林水産大臣又は都道府県知事によって指定される森林。

*3 急傾斜崩壊危険区域：崩壊危険の急傾斜地で崩壊により相当数の居住者又は他の者に危害が生じる急傾斜地及び隣接する土地で、崩壊を助長又は誘発する区域。

*4 砂防指定地：土石流、山崩れなどによる土砂災害を未然に防ぐための砂防ダムの工事をしたり、土地の形を変える等の行為を制限する区域。

➤ 福祉・コミュニティ施設（桑折町の公共施設）

桑折町の教育施設としては、幼稚園、小学校が桑折、半田、睦合、伊達崎の4地区にそれぞれあり、中学校は釀芳中学校1校があります。高等学校や大学はなく、町外へ通学しています。児童・生徒数は減少傾向にあり、今後は子育て支援の充実や児童館、釀芳保育所を含めた施設の有効活用が課題となります。



【釀芳中学校】

また、桑折町には、保健福祉センターや地域包括支援センター^{*}、広域医療施設である公立藤田総合病院など、高齢者も安心して暮らせるような施設が充実していますが、最近、地域医療を担う医師不足が懸念されつつあります。このほか、地域交流センターや公民館、児童館、釀芳保育所といった福祉施設やコミュニティ施設も多く分布しています。

これらの施設を有効に活用することで、高齢者が生き生きと暮らせるまちづくりや地域コミュニティづくりを進めていくことが課題となっています。

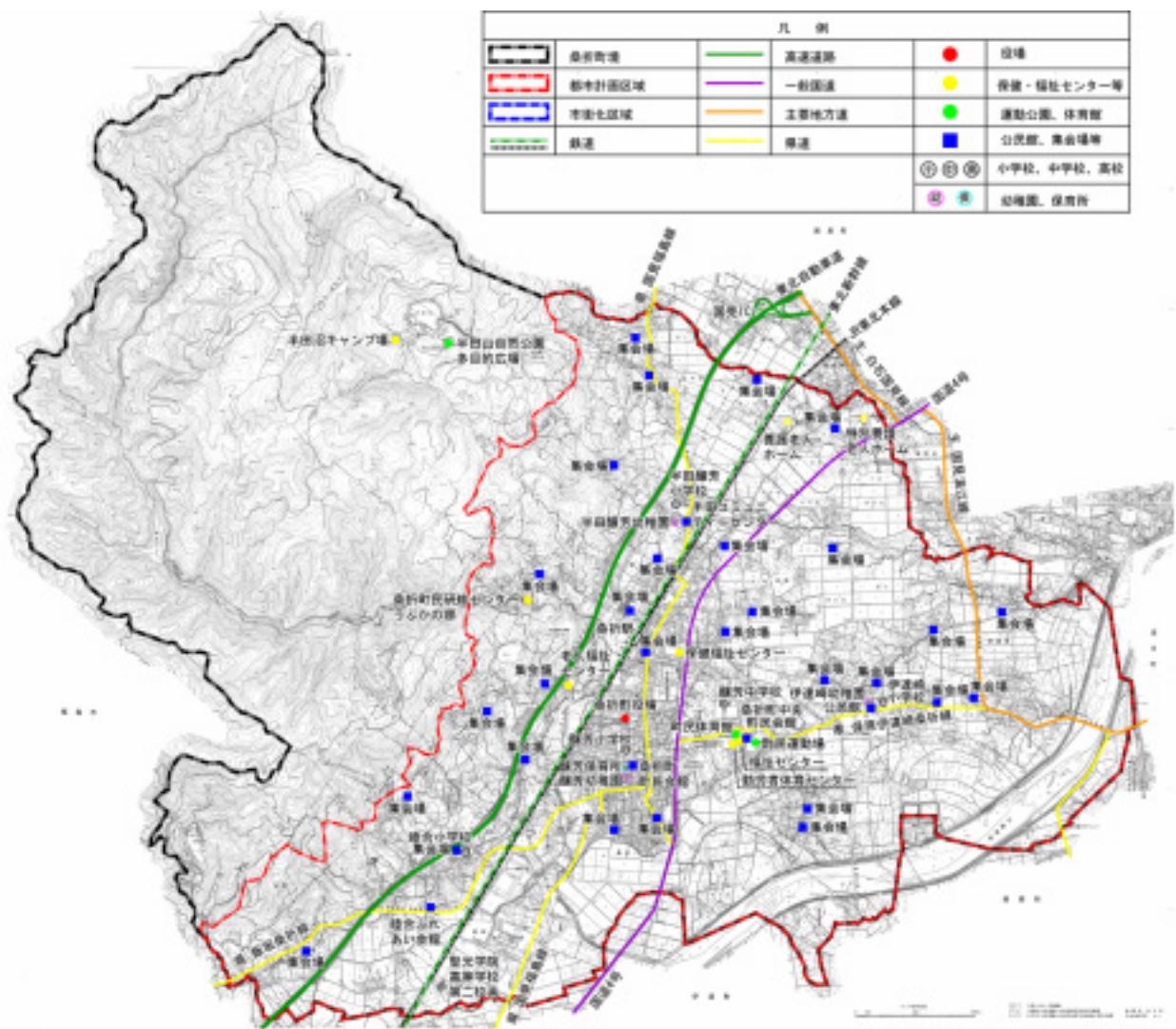


【地域交流センター（釀芳小学校）】



【釀芳保育所】

* 地域包括支援センター：平成18年4月1日から介護保険法の改正に伴い創設された機関で、地域住民の心身の健康維持や生活の安定、保健・福祉・医療の向上、財産管理、虐待防止など様々な課題に対して、地域における総合的なマネジメントを担い、課題解決に向けた取り組みを実践していくことをその主な業務としています。



【公共施設分布図】

▶ 洪水や土砂災害の危険

近年の自然災害の状況をみると、平成 10 年 8 月の集中豪雨による伊達崎・上郡地区の冠水被害があります。洪水ハザードマップ^{*1}（国土交通省）では、阿武隈川沿い低地の大部分が浸水想定区域となっています。

土砂災害についてみると、半田山は明治期に東側斜面において大規模な地すべり活動を起こしており、その後、長期に渡って治山事業が展開された歴史をもっており、山地縁辺部には土砂災害危険区域が広がっています。また、地震災害についてみると、福島盆地西縁断層帯^{*2}がみられます。

半田地区については、冬季の地吹雪、強風などにも注意が必要です。

市街地や集落についてみてみると、細街区や袋小路、老朽化した木造住宅が密集している地区などは、災害時の危険性が高いと考えられます。

学校や公民館など 21 の公共施設が避難所として位置づけられており、収容人員は約 1 万人となっています。

今後は、災害に強いまちづくりを進めるとともに、町民のコミュニティの強化を図っていくことも重要な課題となっています。

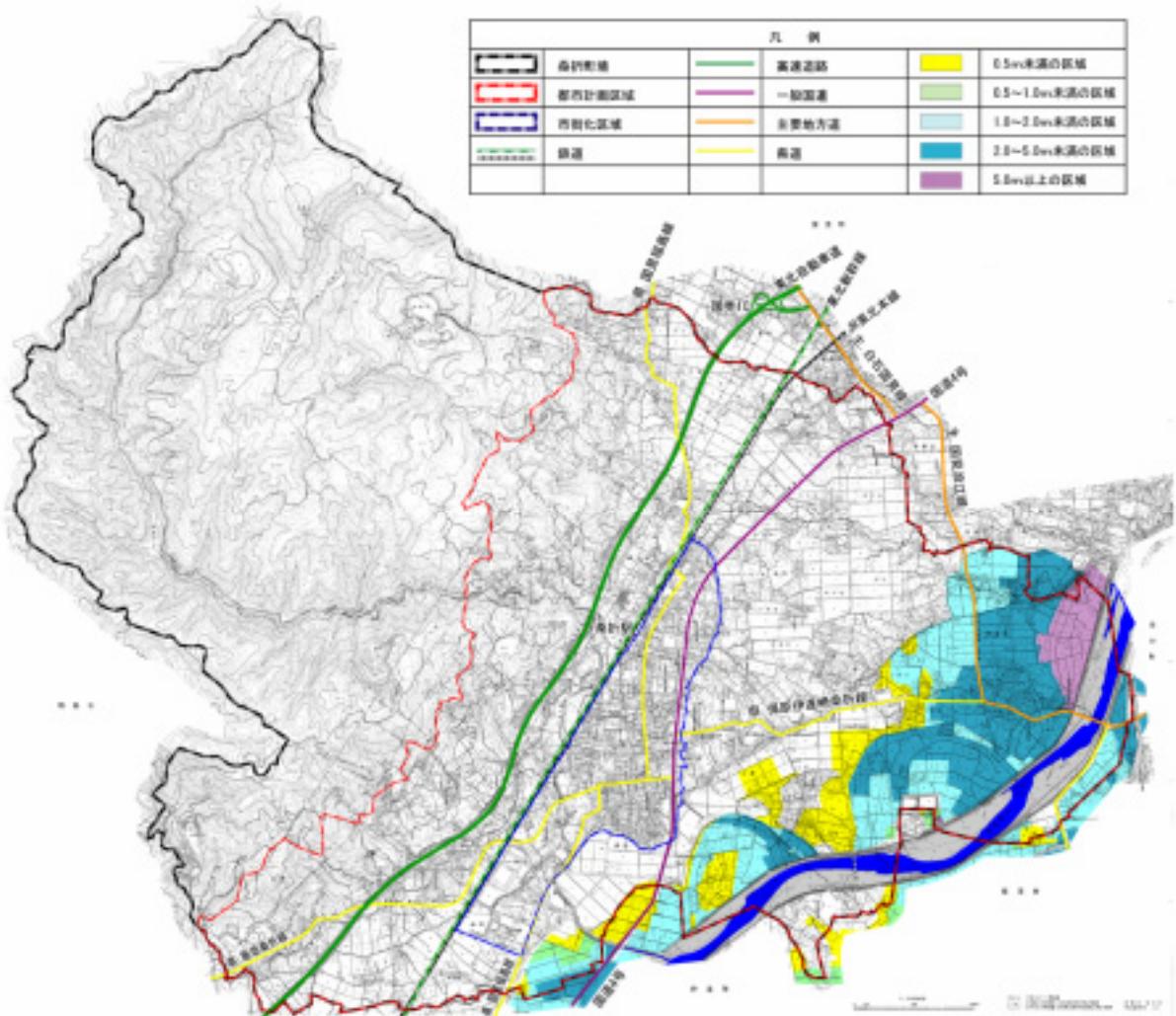


*1 ハザードマップ：自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したものである。

予測される災害の発生地点、被害の拡大範囲および被害程度、さらには避難経路、避難場所などの情報が既存の地図上に図示されている。

*2 : 福島盆地西縁断層帶：宮城県白石市付近から国見町、桑折町を経て、福島市土湯温泉町付近に至る全長約 50 km の活断層で、福島盆地と西側の山地との境界線に断層が存在している。

逆断層型の縦ずれ断層で断層の活動により、福島盆地に対して西側の土地が隆起している。



【洪水ハザードマップ】



【昭和 61 年の水害】

➤ おいしい水を供給する上水道

桑折町の水道事業は、昭和 30 年より、産ヶ沢川を水源として始まりました。現在、町には、地下水を水源とする「砂子沢浄水場」、産ヶ沢川からの表流水を水源とする「内之馬場浄水場」の 2 つの浄水場があり、 $4,439\text{m}^3/\text{日}$ の給水を行っています。

平成 17 年現在、桑折町の上水道普及率は 92.6% となっています。

平成 19 年度から福島地方水道用水企業団から $3,324\text{m}^3/\text{日}$ の本格受水を受けています。

今後は、河川の水質浄化などを図っていくとともに、水資源を大事にするという意識啓発などが課題となっています。



【水源となっている産ヶ沢川】

➤ 水質環境を守る下水道

河川等の水質汚濁は、一般家庭からの生活雑排水が大きな原因と言われています。

桑折町では、現在、「桑折町公共下水道基本計画」に基づき、 332.9ha を都市計画決定し、そのうち 132.4ha の事業認可を受けて、整備を進めています。

下水道区域は、市街化区域とその周辺区域が指定されており、飛び地となっている公立藤田総合病院周辺の区域は、国見町の事業範囲に含まれています。

現在の公共下水道普及率は 26.5% に止まり、全国平均 69.3%、福島県平均 42.6% に比べて大きく下回っています。（平成 18 年 3 月末）

なお、今後は、河川や用水路の水質環境向上のため、市街化調整区域の集落における合併処理浄化槽等の事業を含めて整備を促進していく必要があります。

➤ 桑折自慢と観光

桑折町には、その風土に根付いた自然環境や歴史・文化、果樹などの農作物といった様々な自慢できる「宝」があります。

自然を満喫できる半田山や、ゲンジボタルとカジカガエルなどにも出会える産ヶ沢川の水辺、阿武隈川や周辺に広がる広大なこおり桃の郷や田園風景・農村集落風景などは、桑折町を代表する地域資源といえます。

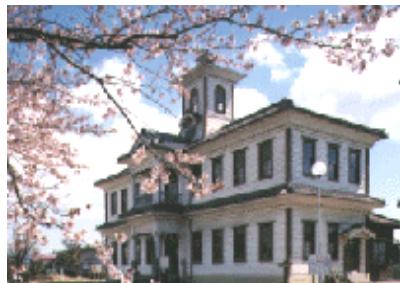
また、風土に根付いた歴史・文化も町の貴重な財産です。旧奥州街道と旧羽州街道の分岐点・宿場町として栄えた歴史や街並み景観、国指定重要文化財の「旧伊達郡役所」や国指定史跡「西山城跡」をはじめ、点在する寺社なども魅力的です。町の産業発展に貢献した「半田銀山」「伊達西根堰」「養蚕業」なども産業遺産として忘れることができません。

また、「こおり温泉・うぶかの郷」、「桜の見本園」、「夏から秋にかけてみずみずしい実りを結ぶ桃やリンゴなどの果樹」「地域を楽しく散策できる“こおり”の小径」は、地域づくりや観光資源としても価値のあるものです。

今後は、町民との協働のもとに、宝を地域づくりや観光に活かす工夫を考えたり、埋もれている宝を発掘したり、地域のお祭りを盛りあげて新しい宝を創っていくことも必要です。



【こおり桃の郷】



【旧伊達郡役所】



【半田山自然公園】



【街道まつり】



【桃などの果樹】



【うぶかの郷と産ヶ沢川】



【穏やかな田園風景の緑】



【西山城跡石塁】



【街道沿いに残る土蔵造の建物】